

三重県桑名市

笠松遺跡発掘調査報告書

2005

桑名市教育委員会

例 言

- 1 本書は三重県桑名市大字上野字笠松 303 に所在する笠松遺跡（市遺跡No. 139）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は宅地造成にかかる事前緊急調査として、原因者負担を受けて行った。
- 3 現地での調査は平成 16 年 7 月 28 日から 8 月 9 日にかけて実施した。室内での整理作業は現地調査終了後、平成 17 年 6 月にかけて実施した。
- 4 調査体制は以下のとおりである。
 - 調査主体 桑名市教育委員会
 - 調査員 斉藤理（桑名市教育委員会） *調査担当
宇佐見亜紀（桑名市教育委員会）
 - 調査参加者 岩間昭道、岡本広子、奥田崇晃、大原夕佳、前橋香織、威能拓実、
大谷茂之、石川卓弥、久野公章（以上愛知学院大学学生）、
長崎千明（愛知県立大学学生）、柴田涼子、水谷吏江

なお、文化財保護法に基づく諸手続及び調整事務等については水谷芳春（桑名市教育委員会）が担当した。
- 5 本報告は第 1 章第 1 節を水谷芳春、第 1 章第 2 節、第 3 章第 2 節、第 4 章を斉藤、第 2 章、第 3 章第 1 節を宇佐見が執筆した。全体の編集は水谷吏江、柴田の協力を得て、斉藤、宇佐見が行った。
- 6 発掘調査及び本書の作成過程において、竹内英昭（斎宮歴史博物館）にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表す。
- 7 本調査は、大和ハウス工業株式会社並びに日立金属株式会社の文化財に対する深いご理解のもと実施することができた。調査に対する格別のご協力、ご援助に対して厚く御礼申し上げます。
- 8 本調査に関する記録及び出土遺物等の諸資料は桑名市教育委員会で保管している。

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第3章 検出された遺構と遺物	
第1節 遺構	4
第2節 遺物	6
第4章 まとめ	8

表 目 次

表1 遺物観察表

図版目次

図版1 遺跡位置図、調査区位置図
図版2 遺構平面図（1）
図版3 遺構平面図（2）
図版4 遺構平面図（3）
図版5 遺構平面図（4）
図版6 調査区西壁（1）
図版7 調査区西壁（2）
図版8 調査区南壁・遺構断面図
図版9 遺物実測図（1）
図版10 遺物実測図（2）

写真図版目次

写真図版1 遺構

写真図版2 遺構、遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成16年5月17日、大和ハウス工業株式会社から、三重県桑名市大字上野字笠松、大字東方字徳成地内における開発行為の事前協議願が桑名市都市計画課に提出された。都市計画課から合議をうけた桑名市教育委員会文化課は桑名市開発指導要綱に基づき大和ハウス工業株式会社と協議を開始した。文化課は開発予定地のうち大字上野字笠松については、平成16年3月15日に行った試掘調査によって遺跡が確認されていたために、文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会されたい旨を説明した。

試掘調査は7箇所のトレンチを設定し、掘削を行った。その結果、対象地は以前の造成工事によって大半の遺構が失われていたものの、旧地形のわずかに残る東隅で遺物包含層及び、土坑等の遺構が確認され、土師器等の遺物が出土した。そのため、文化財保護法第57条の5第1項・第57条の6第1項に基づく遺跡発見の通知を平成16年5月28日付教文第137号にて三重県教育委員会に提出した。発見された遺跡は小字名をとって笠松遺跡とし、市遺跡No.139として台帳、地図等に登録された。

その後、大和ハウス工業株式会社と文化課は、遺構に影響する開発を行う場合は事前に発掘調査による記録保存が必要であることを確認し、遺跡保存にむけての協議を重ねて行ったが、工法上、現状保存が困難と考えられる擁壁工事によって破壊される部分に関しては、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

なお、浄化槽の埋設される部分に関してもその掘削深度から遺構が破壊されることが予想されたが、現時点で浄化槽の位置が決定しないため、決定次第調査を行うことを確認した。

大和ハウス工業株式会社より、平成16年7月9日付教文第233号にて、文化財保護法第57条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出を受けた文化課では、平成16年7月9日付教文第234号で三重県教育委員会に届出を行い、文化課主事齊藤理を調査担当者として平成16年7月28日に発掘調査に着手した。文化庁に対する埋蔵文化財発掘調査の報告は、文化財保護法第58条の2第1項に基づき、平成16年8月11日付教文第301号にて行った。

第2節 調査経過

調査は平成16年7月28日から開始し、上層から順次掘削を行った。表土層については試掘調査で近年の耕作土であることが確認されていたためバックホウでの掘削とし、排土は調査区の西に搬出した。

表土直下のレベル18,400m前後で遺物包含層と考えられる暗褐色粘質土層が確認できたため、人力での掘削に切り替え、遺物の採集を行った。遺物包含層の堆積はさほど厚くなく0.3m前後

であった。

レベル 18, 100 m前後で遺構と考えられる掘り込み等が検出されたため、精査を行った。その結果、土坑、溝等の遺構が確認されたため遺構面と認識し、写真撮影、測量等を行った。土坑、溝は埋土の堆積状況を確認するため半裁、乃至は畦を残して掘削し、断面図を作成した。

調査区がトレンチ状となったことや、近年の攪乱が激しかったため遺構面の観察が困難であったが、溝 1 条、土坑数基等を検出した。遺物は弥生土器、須恵器、灰釉陶器が出土する等の成果が見られた。

掘削、写真撮影終了後、地形測量を行い、8月9日現地での調査を終了した。整理作業は引き続き実施し、図面整理、出土遺物の線状、実測、写真撮影等について随時作業を行った。

第2章 遺跡の位置と環境

笠松遺跡は三重県桑名市大字上野字笠松に所在する。

本遺跡のある桑名市は三重県の北東部に位置し、北は岐阜県海津市、西はいなべ市、南は四日市市・三重郡朝日町に接する。市の東部から南部にかけては揖斐川・長良川の両河川が流れ、北部には養老山脈より続く丘陵部が伸びている。また市の南部には西から南東へと流れる員弁川があり、その両岸には標高40～70m弱の丘陵地が形成されている。市域には河川の影響等により、丘陵部からごく緩やかな傾斜を持ちつつ広がりを見せる沖積平野が発達している。

本遺跡は市域の東部に広がる沖積平野に張り出す台地上にあり、周辺には多数の遺跡が確認されている。本遺跡の南方には上野遺物出土地（市遺跡No.95）があり、弥生土器が採集されている。さらに南の長良川・揖斐川と員弁川を見下ろす丘陵の先端部には中世城館跡である矢田城跡（市遺跡No.96）が所在する。これは地誌・軍記等によると、戦国期は矢田半右衛門俊元の居城であったとされるものである。その後、矢田城には織田信長の命を受けた滝川一益が居住したこともあり、現在でも堀切や郭の跡と考えられる平坦面が残る。また、同一丘陵上を北東に進むと、矢田城とほぼ同時期と考えられる中世城館跡の愛宕山城跡（市遺跡No.98）が所在する。

矢田城跡は近世以降、修験宗の寺院である走井山勧学寺が置かれ、明治期の廃寺の危機を乗り越えて現在まで続く。勧学寺の開基は地誌等によると、天平年間に天台宗の僧行基とされるが判然としない。現存する資料では寛保3（1743）年の棟札に、寛文4（1664）年に勧学寺が再建されたことが記されている。また、鬼瓦にも寛文4年と明治23（1890）年に当寺が再建されたと刻まれている。これらの文字資料及び、地誌等から推測すると、少なくとも17世紀後半には存在していたようであり、矢田城が城郭としての機能を失った後、しばらくしてからこの地に勧学寺が置かれたものと思われる。

本遺跡を含む益世地区では、平成6年に西方台地A遺跡（市遺跡No.94）の試掘調査が行われている。これは遺物包含層のみの確認であったが、奈良～平安時代の須恵器、灰釉陶器等が若干出土した。その後、益世地区での本格的な発掘調査は行われておらず、今回の調査は平成6年以来の調査となった。

第3章 遺構と遺物

第1節 遺構

調査は、前述したように宅地造成にともなう擁壁工事によって破壊される部分を対象とした。よって開発予定地の東端に狭長な調査区が設定されることとなった。

調査区及び、その周辺は比較的広い面積の平坦面が広がっているが、これは以前に行われた造成工事によるものと思われる。これは西から東へ傾斜した斜面を削平し、旧表土上に盛土することによって平坦面を構築したものと考えられ、調査区及び、その周辺の旧地形はその際に大きく改変されている。削平を免れ、旧地形が盛土によって保存された僅かな部分に今回の調査区が設定された。

遺跡廃絶後の堆積層及び、遺物包含層の一部は以前の造成工事の際に削平されているようで、基本層序（図版6・7）は近年の客土層（表土層、碎石層等）の直下に、褐色あるいは暗褐色、黒褐色を呈する良好な遺物包含層があった。遺構はすべて灰褐色あるいは赤褐色を呈する粘質の地山面に掘り込まれている。遺物包含層は調査区の全面で確認されているが、遺物の出土はさほど多くない。

遺構は疎密があるものの、調査区のほぼ全域で検出された。北半分では近代以降の攪乱が目立って見られたが、その他の部分ではおおむね良好に遺存していた。検出された遺構は溝1条、柱穴31基、土坑6基である（図版2～5）。このうち性格が明確に判別できるものは溝、柱穴等きわめて少ない。柱穴は平面形、規模等から柱穴と認識したが、建物跡等として復元できるものはない。

以下に主な遺構の詳細を記す。

溝1 幅1.3 m、深さ0.26 m。調査区中央やや北よりを北西から南東にかけて延びる。断面の形状は箱状を呈する。溝1の両肩に位置する柱穴7、8は溝1と同時期に存在しており、柵列であった可能性が考えられる。遺物は土師器が出土している。

柱穴1 直径0.52 m、深さ0.33 m。調査区北端に位置する。

柱穴2 直径0.32 m、深さ0.24 m。調査区北端に位置する。

柱穴3 直径0.28 m、深さ0.22 m。調査区北端に位置する。

柱穴7 直径0.25 m、深さ0.27 m。溝1の北側に隣接する。

柱穴11 直径0.50 m、深さ0.50 m。調査区中央の東端に位置する。東側は調査区外となるため全体の形状は不明である。遺物は土師器甕が出土している。

柱穴14 直径0.22 m、深さ0.14 m。調査区中央の東端に位置する。東側は調査区外となるため全体の形状は不明である。遺物は土師器甕が出土している。

柱穴 15 直径 0.31 m、深さ 0.42 m。調査区のほぼ中央に位置する。遺物は土師器甕が出土している。

柱穴 17 直径 0.38 m、深さ 0.25 m。調査区中央の西端に位置する。遺物は土師器甕が出土している。

柱穴 18 直径 0.39 m、深さ 0.21 m。調査区中央やや南よりに位置する。柱穴 19 と近接する。

柱穴 19 直径 0.38 m、深さ 0.10 m。調査区中央やや南よりに位置する。柱穴 18 と近接する。遺物は須恵器杯身が出土している。

柱穴 20 直径 0.35 m、深さ 0.36 m。調査区中央やや南よりに位置する。土坑 4 と切り合い関係にある。両者とも同一の埋土であるが、柱穴 20 が土坑 4 の南側の上端部を切っていることが平面形から確認できる。

柱穴 22 直径 0.40 m、深さ 0.36 m。調査区中央やや南よりに位置する。

柱穴 24 直径 0.60 m、深さ 0.20 m。調査区中央やや南よりの西端に位置する。

柱穴 28 直径 0.34 m、深さ 0.16 m。調査区南の東壁に近い部分で検出された。

土坑 1 長辺 0.89 m、短辺 0.78 m、深さ 0.16 m。調査区中央やや南よりに位置する。西側が調査区外となるため平面形は不明である。

土坑 3 長辺 1.63 m、短辺 0.82 m。調査区中央やや南よりの東壁に近接する部分に位置する。東側は調査区外、さらに南側は攪乱によって切られるため平面形は不明である。遺物は弥生土器甕と土師器甕が出土した。

土坑 6 長辺 2.22 m、短辺 0.90 m、深さ 0.17 m。調査区南側の西壁に近接する部分に位置する。西側が調査区外となるため平面形は不明である。遺物は弥生土器、土師器等が出土した。

第2節 遺物

遺物は遺構及び遺物包含層を中心に、コンテナケースにおよそ4箱分が出土している。前述したように遺物包含層の一部が削平されていることから、表土層や攪乱等からも少なからず出土がみられた。

遺物は弥生時代前期に比定できる土器の他、土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、近世陶磁器等、様々な時期、種別が出土しているが、接合、図化できる遺物は少なかった。

以下、遺構、層位ごとに遺物の詳細を記述する。

溝1 1は土師器甕。口縁端部に刻み目、外面頸部に3～4条の沈線、外面体部にハケ目を有する。全体にやや磨耗している。2は口縁部のみの出土。土師器の壺乃至は甕と思われる。内面に突帯を持つ。全体にやや磨耗している。

土坑2 3は加工円盤。近世瀬戸美濃産の陶器鉢、甕等の大型製品を加工したもので、内外面とも灰釉が施される。

土坑6 弥生前期に比定できる土器（4～12）、古墳時代と考えられる土師器（13）が出土した。4は甕の口縁部で外面体部にハケ目、外面口縁部・内面体部に指ナデ痕が見られる。外面体部には煤が若干付着する。5は甕の口縁部。内外面にミガキが施される。6は甕の口縁部で頸部には沈線が一条施される。全体に磨耗が著しい。7は甕の口縁部。口縁端部には刻み目が施される。8は甕の口縁部。内外面にミガキが施されている。9は全体に磨耗が激しく器種、調整等は不明である。10は甕。内面が顕著に磨耗する。11は甕。外面体部にはハケ目、内面には指ナデ痕が見られる。12は甕。外面体部に縦方向の指ナデが見られ、全体に煤が薄く付着している。13は甕。内面と外面体部にハケ目、外面頸部から口縁部にかけては指ナデが認められる。

遺物包含層 土師器（14、18）、須恵器（19、24）、灰釉陶器（25、26）、山茶碗（27、28）が出土している。14はコダイの土師器甕。全体に磨耗が著しく、調整等は不明である。15は9世紀頃の土師器甕。ナデ調整の痕跡が残る。16は土師器の甕。磨耗が顕著である。17は土師器の甕。全体に磨耗が著しい。18は中世の土師器皿。ロクロ成形で、外面底部には糸切り痕が残る。19は須恵器の杯身。外面底部はヘラ削り調整されている。20は須恵器の高杯。外面底部にはヘラ削りが見られる。21は須恵器の高杯。脚部のみの残存で、外面はナデ調整される。22は須恵器の甕。外面は縦方向の平行状タタキの後、工具により横方向にナデが施され擬格子紋となる。内面には青海波紋状となる当て具痕が明瞭に残る。23は須恵器の甕。外面には平行状タタキ、内面には当て具痕が僅かに残る。24は須恵器の甕。外面には平行状タタキが明瞭に残るが、内面の当て具痕は指ナデによって明瞭には看取できない。25は杯釉陶器の椀。外面体部及び、底部は回転ヘラ削り調整され、その後にナデにより高台が付けられる。高台は端部の接地面積が小さくなり、外面下半に稜を有するいわゆる三日月高台である。外面底部の中心には僅かに糸切り痕

が残る。また外面底部にはヘラ記号が施されている。26は杯釉陶器の椀乃至は皿。外面底部は指ナデ調整され、崩れた三日月高台が付けられる。高台端部は磨耗が著しい。27は灰釉陶器の椀。無釉で内外面ともに指ナデ痕が明瞭に残る。28は12世紀中葉に比定できる山茶碗。外面底部には糸切痕が残り、断面が三角形となる高台が付けられる。内面底部には指ナデが僅かに施される。

攪乱 29は土師器の杯。手づくねで成形されるが全体に磨耗が著しい。30は土師器の甕。全体に磨耗が著しく詳細な時期等は不明である。

排土 31は土師器の甑。把手部分のみの出土で、手づくねで製作された際の指頭痕が残る。32は須恵器の甕。外面は縦方向の平行状タタキの後、工具により横方向にナデが施され擬格子紋となる。内面には青海波紋状となる当て具痕が明瞭に残る。33は東海地方南部系の山茶碗。13世紀前半に比定できる。外面底部には高台が付けられ、端部に靱殻痕が残る。34は東海地方南部系の山茶碗。13世紀前半に比定できる。外面底部には高台が付けられるが端部は磨耗が激しい。35は近世瀬戸美濃産の陶器碗。外面体部と内面に淡緑色の灰釉が施されている。高台端部は磨耗が著しい。36は近世瀬戸美濃産の陶器鉢。外面体部と内面に黄褐色の灰釉が施されている。37は12～13世紀頃の鉢乃至は短頸壺の底部。内面には指ナデ痕、外面底部は砂粒と靱殻痕が残る。38は近世瀬戸美濃産の箱型湯呑茶碗。染付の陶胎で内外面に呉須により文様が描かれる。

第4章 まとめ

本章では特徴的な遺構や遺物についてその性格等を考えるとともに、出土遺物から遺跡の年代等を推測し、調査のまとめとしたい。

溝1について

溝1は調査区のほぼ中央で検出された。北西から東南方向に真っ直ぐに延び調査区外へと続く。柱穴、土坑などはこの溝1の南側に多く検出されたため、溝1は何らかの区画を表すものの可能性が考えられる。掘削の時期は出土遺物が少ないため断定できないが、他の遺構等の状況から古墳時代、6世紀頃にはすでに機能していたものと思われる。

土坑6について

土坑6からは弥生時代前期に比定できる土器が多く出土した。埋土中には古墳時代の土師器も若干含まれており、埋没時期は古墳時代にかかるものと考えられるが、弥生時代の遺構である可能性も否定できない。近接する上野遺物出土地でも弥生土器が出土しており、この台地上の土地地用がいつの時期まで遡るかを考えるうえで重要な遺構といえよう。

出土遺物と遺跡の年代について

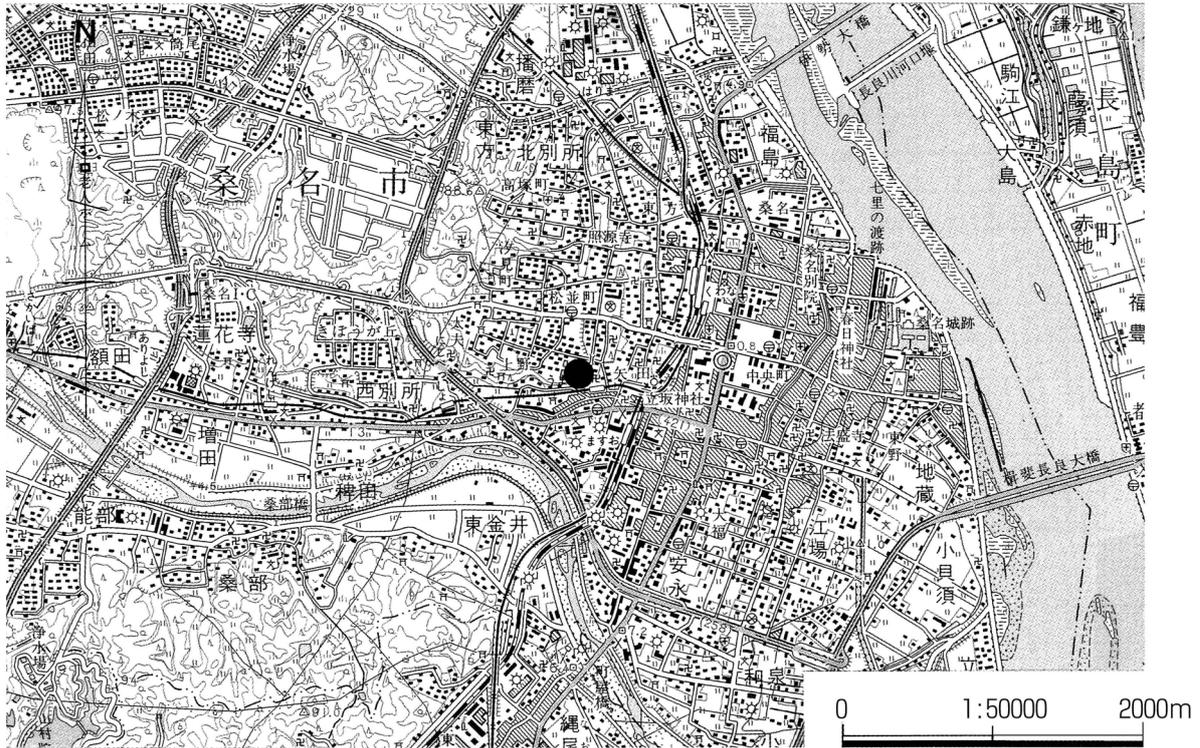
本遺跡は弥生時代前期から近世にかけて多様な時期の遺物が出土した。遺構にともなう遺物の出土はさほど多くなく、大多数の遺構は時期決定できないが、前述のように溝1は概ね古墳時代、土坑6は古墳時代もしくは弥生時代前期に構築された可能性が高い。また、土坑2からは近世の陶器が出土しており、近世に埋没したことは明らかである。この他、遺物包含層からは古代、中世の遺物が出土しており、古代、中世の遺構も少なからず存在するものと思われる。検出された遺構はすべて同一の遺構面（地山面）に構築されており、古墳時代以降、この丘陵上では連綿と生活が営まれてきた可能性も考えられよう。

検出されたこれらの遺構は、今まで述べてきたように以前の造成工事を免れた僅かな部分に残存したものである。調査地及び、その周辺は大きく改変され、現況から旧地形を窺い知ることが非常に困難である。調査地周辺を踏査すると、斜面を削平し、旧表土上に盛土する手法で行われているこの造成工事は、旧地形に合わせて細かく実施されているようで、盛土の下になる部分には旧地形が温存している可能性が高いと思われる。今後、出来る限り旧地形の復元を行い、遺跡の立地と環境を考察していく必要があると思われる。

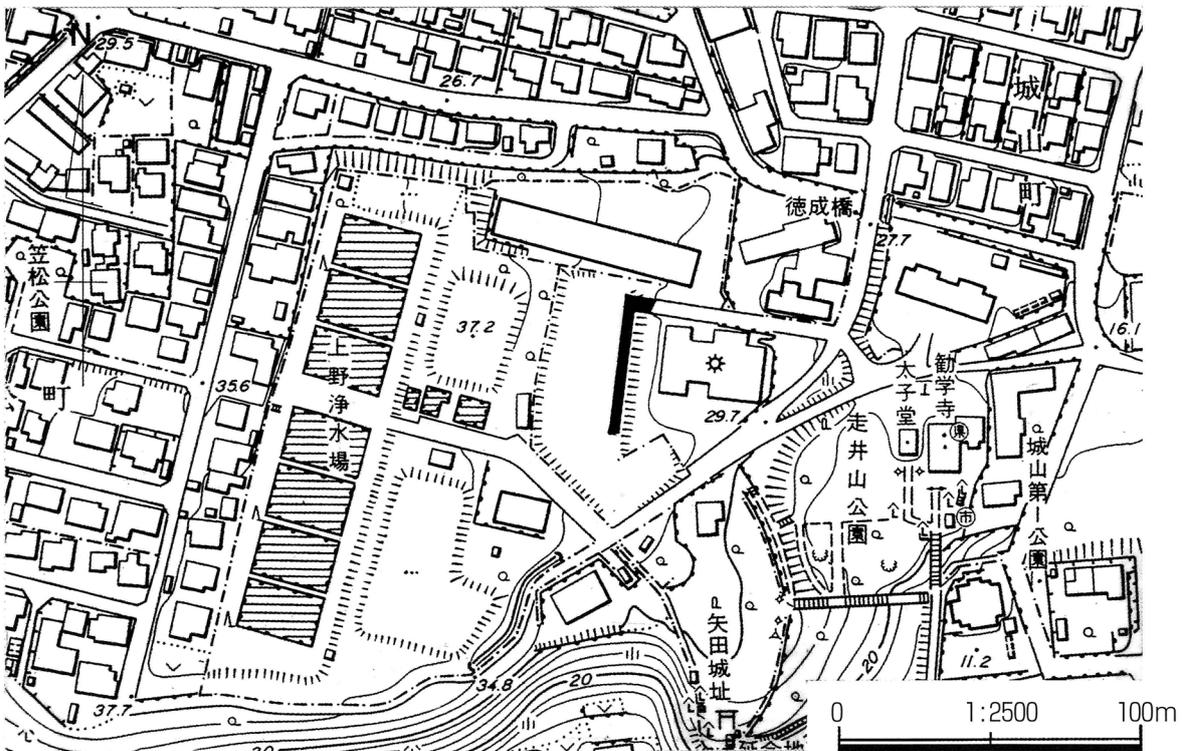
番号	遺構名	器種	法量 (cm)			調整・技法の特徴等	推定年代
			口径	高台径	器高		
1	溝 1	土師器 甕	-	-	-	外面口縁部刻み目 外面頸部沈線 外面体部ハケ目磨耗	
2	溝 1	土師器 壺・甕	-	-	-	内面に突帯 磨耗	
3	土坑 2	陶器 加工円盤	-	-	-	近世陶器を転用 内外面灰釉 瀬戸美濃	近世
4	土坑 6	弥生土器 甕	(18.8)	-	-	内面体部、外面口縁部指ナデ外面ハケ目	弥生前期
5	土坑 6	弥生土器 甕	-	-	-	内外面ミガキ	弥生前期
6	土坑 6	弥生土器 甕	-	-	-	外面頸部沈線	弥生前期
7	土坑 6	弥生土器 甕	-	-	-	口縁部端部に刻み目	弥生前期
8	土坑 6	弥生土器 甕	-	-	-	内外面ミガキ	弥生前期力
9	土坑 6	弥生土器 不明	-	-	-	全体的に磨耗	弥生前期力
10	土坑 6	弥生土器 甕	-	(7.3)	-	内面磨耗	弥生前期
11	土坑 6	弥生土器 甕	-	(7.9)	-	内面指ナデ 外面体部ハケ目	弥生前期
12	土坑 6	弥生土器 甕	-	(6.4)	-	外面体部指ナデ	弥生前期
13	土坑 6	土師器 甕	(18.0)	-	-	内面、外面体部ハケ目 外面頸部から口縁部指ナデ	古墳力
14	包含層	土師器 甕	-	-	-	磨耗	古代 (7~9世紀頃力)
15	包含層	土師器 甕	-	-	-	ナデ	9世紀
16	包含層	土師器 甕	-	-	-	磨耗	
17	包含層	土師器 甕	-	-	-	全体的に磨耗	
18	包含層	土師器 皿	-	(6.1)	-	ロク口成形 糸切痕	中世
19	包含層	須恵器 杯身	-	-	-	外面底部へら削り	
20	包含層	須恵器 高杯	-	-	-	外面底部へら削り	
21	包含層	須恵器 高杯	-	-	-	脚部 外面回転ナデ調整	8世紀力
22	包含層	須恵器 甕	-	-	-	外面平行状タタキの後に工具による回転ナデ調整(擬格子) 内面青海波紋状当て具痕	7~8世紀
23	包含層	須恵器 甕	-	-	-	外面平行状叩きの後にナデ調整 内面当て具痕	
24	包含層	須恵器 甕	-	-	-	外面平行状叩き 内面当て具痕 猿投	8世紀頃か
25	包含層	灰釉陶器 椀	-	(8.0)	-	外面底部へら削り 付け高台 外面底部へら記号 内面底部・高台端部使用痕 猿投	9世紀
26	包含層	灰釉陶器 椀・皿	-	6.2	-	付高台 内面底部 高台端部使用痕 猿投	9世紀
27	包含層	灰釉陶器 椀	-	-	-	口縁部使用痕 尾張	10世紀
28	包含層	山茶碗 椀	-	(7.4)	-	内面底部指ナデ 糸切り痕 付け高台 内面底部・高台端部使用痕 尾張	12世紀中葉
29	排土	土師器 杯	-	-	-		古代
30	攪乱	土師器 甕	-	-	-	一部磨耗	古代
31	排土	土師器 甕	-	-	-	把手 手づくね 指頭痕	
32	排土	須恵器 甕	-	-	-	外面平行状タタキの後に工具による回転ナデ調整(擬格子) 内面青海波紋状当て具痕	
33	排土	山茶碗 椀	-	-	-	付高台 モミガラ痕 尾張	13世紀前半
34	排土	山茶碗 椀	-	(6.2)	-	付高台 全体的に磨耗	13世紀前半
35	排土	陶器 碗	-	4.0	-	外面体部・内面底部灰釉 高台端部使用痕 瀬戸美濃	近世
36	排土	陶器 鉢・短頸壺	-	(9.4)	-	外面体部・内面灰釉 瀬戸美濃	近世
37	排土	陶器 甕	-	(16.0)	-	内面指ナデ 平底 外面底部モミガラと砂粒痕	中世 (12~13世紀)
38	排土	磁器(陶胎) 箱型湯呑	-	3.7	-	染付 瀬戸美濃	近世 (19世紀)

復元値については()で示した。

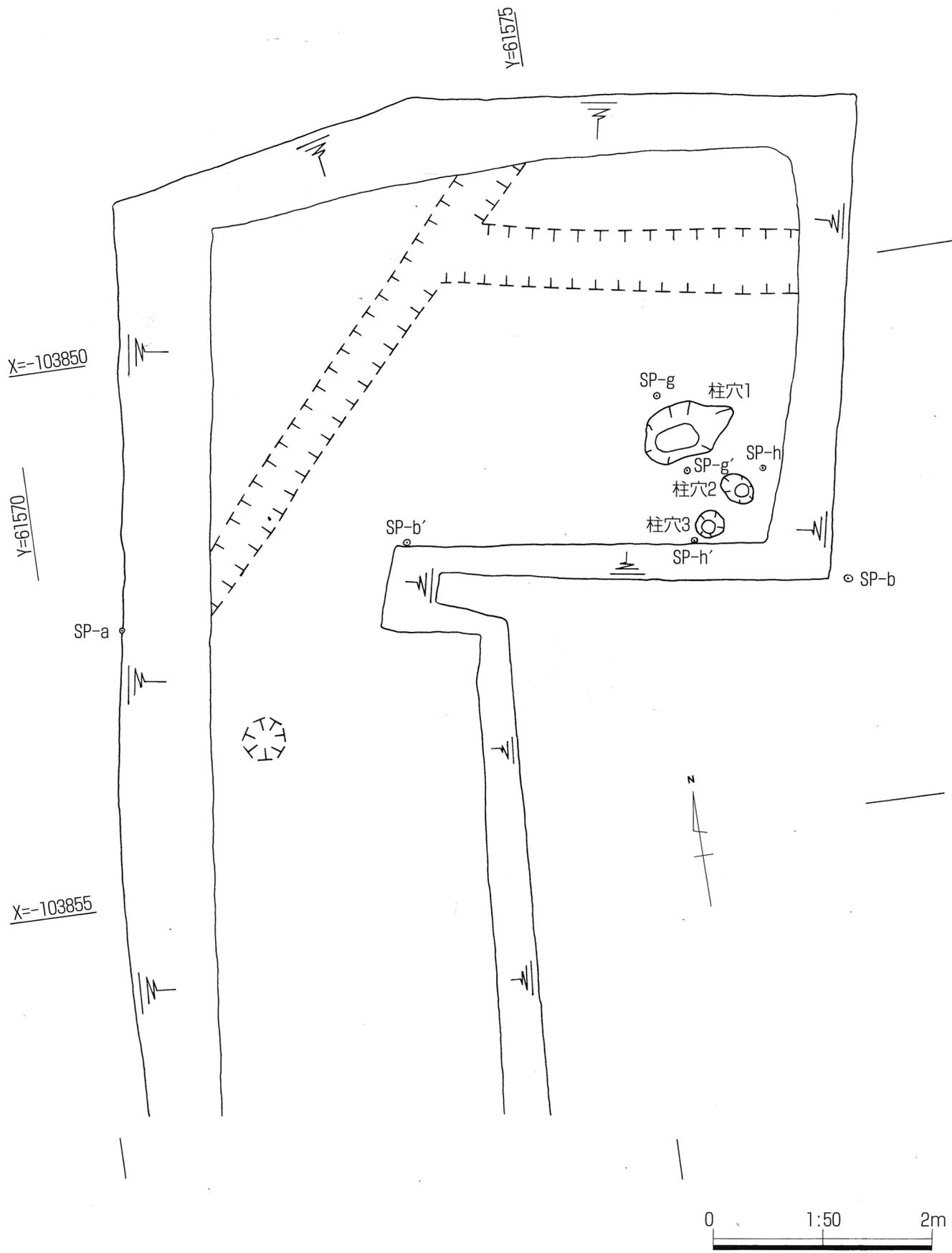
表1 遺物一覧表



遺跡位置図



調査区位置図



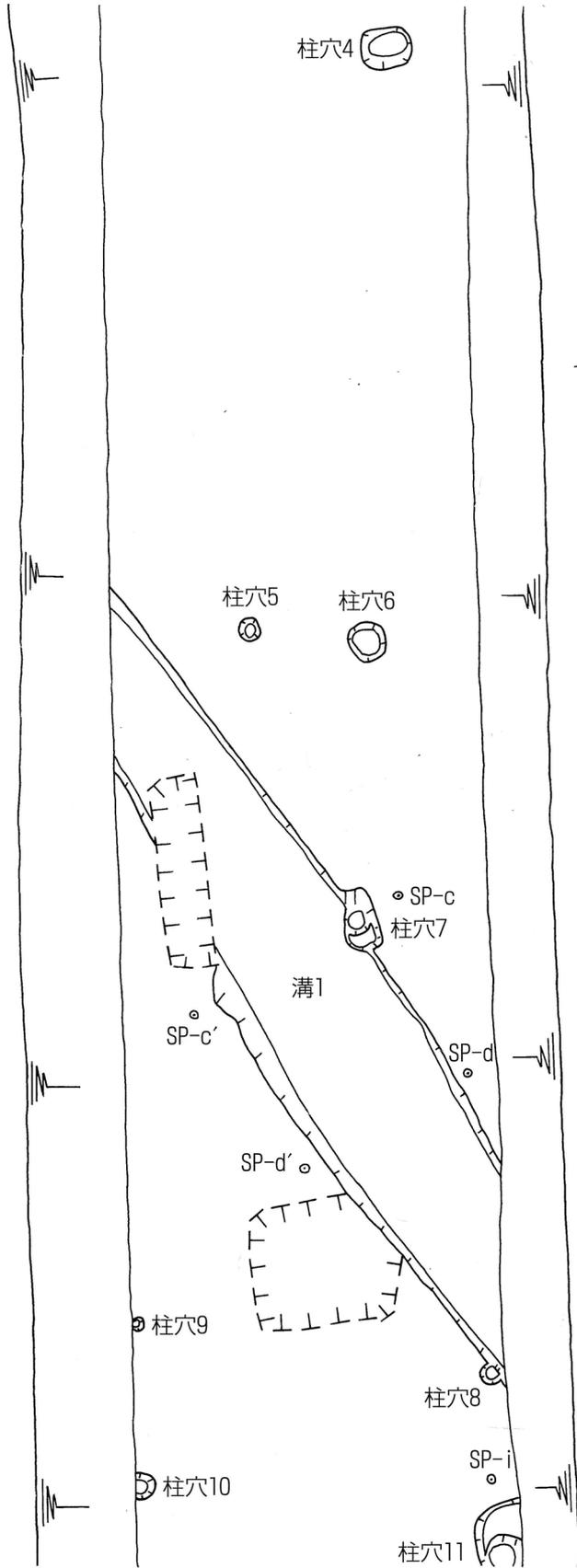
图版2 遺構平面図

Y=61570

Y=61575

X=-103860

X=-103865

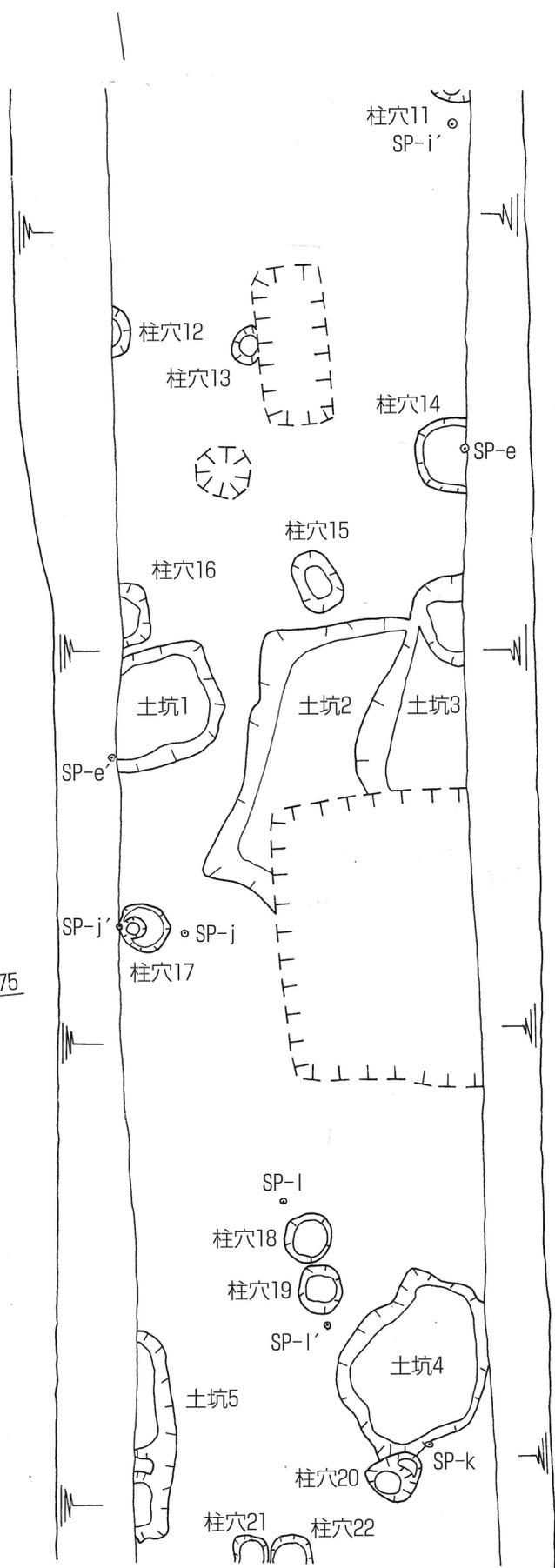


図版3 遺構平面図(2)

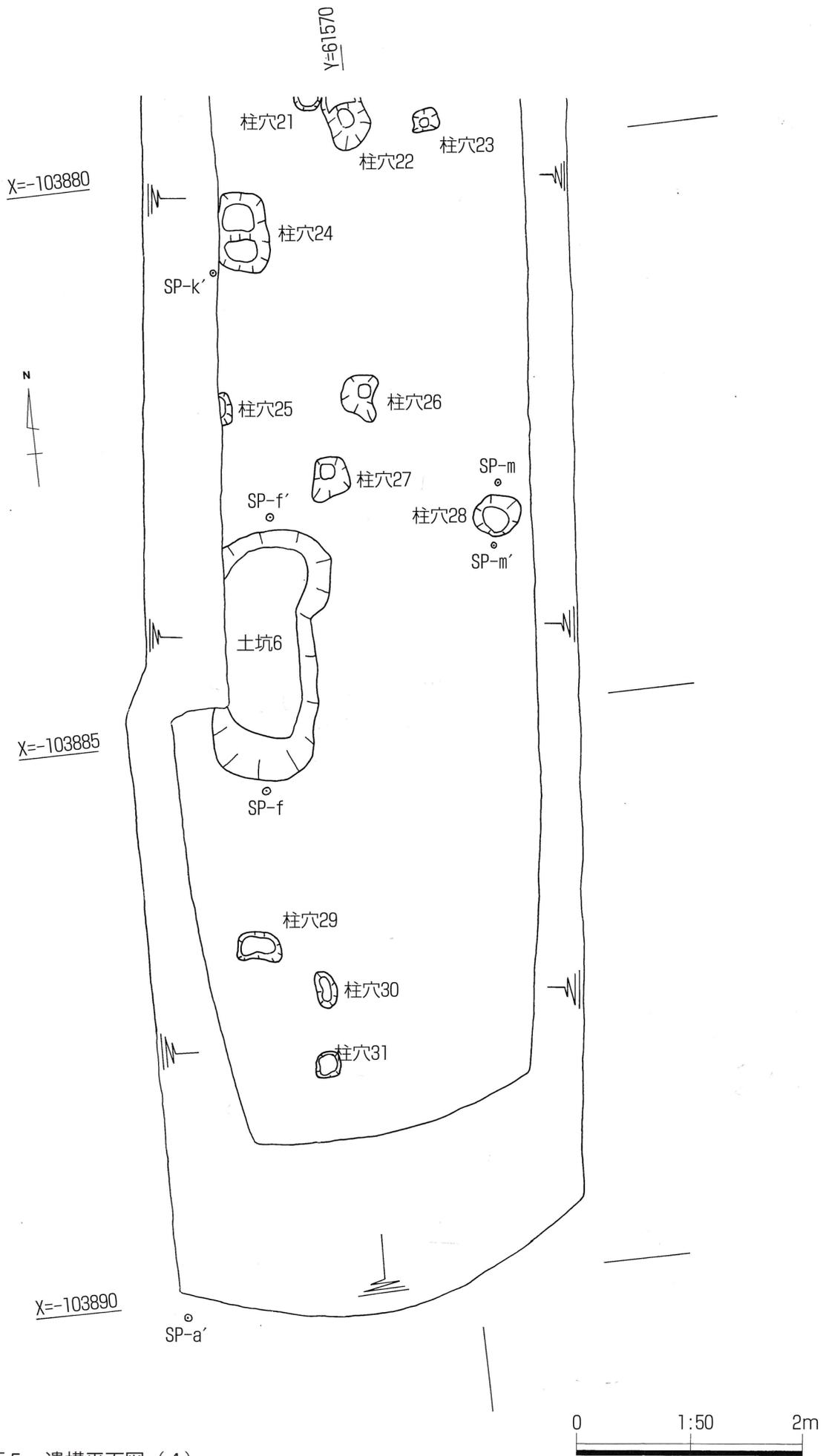
X=-103870



X=-103875



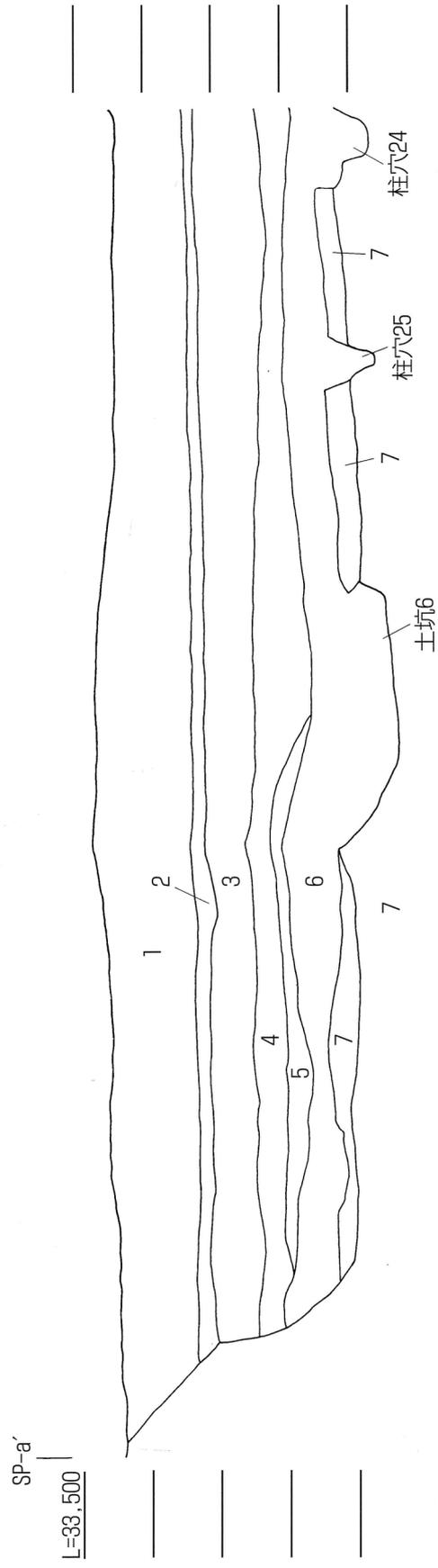
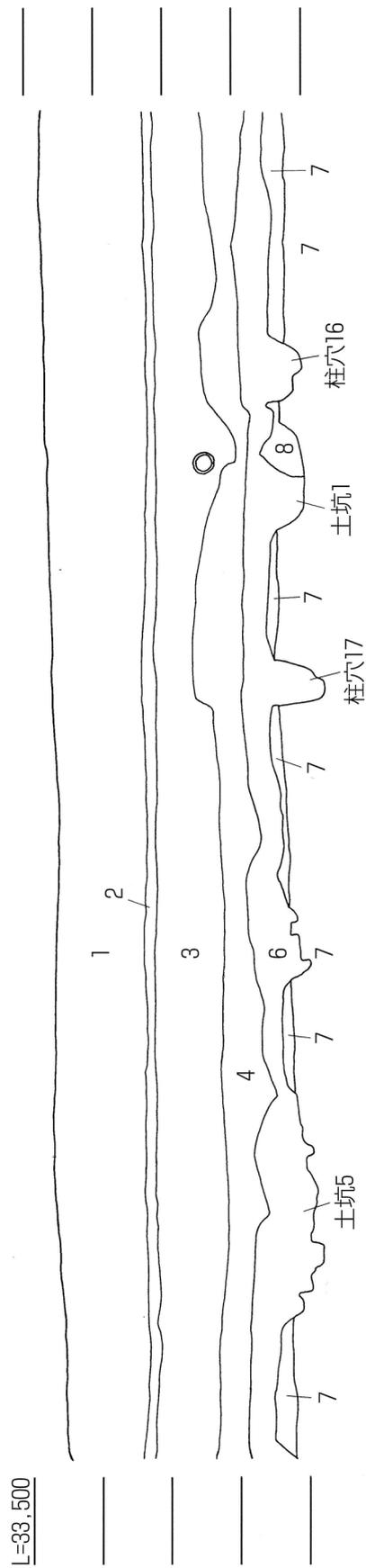
图版4 遺構平面図 (3)



图版5 遺構平面図(4)

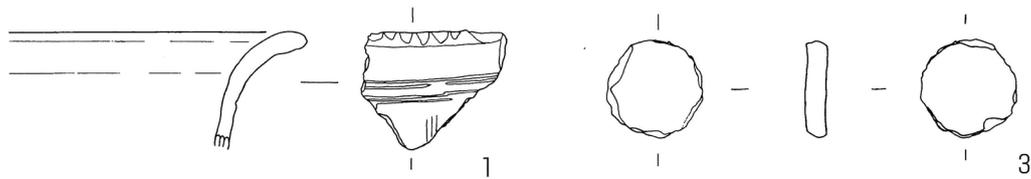
図版6 調査区西壁(1)



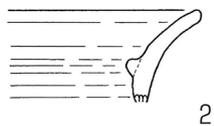


- 1 表土層
- 2 碎石層
- 3 現代の盛土
- 4 褐色土層 (包含層)
- 5 暗褐色土層 (包含層)
- 6 黒褐色土層 (包含層)
- 7 赤褐色粘質土層 (地山)
- 8 灰褐色粘質土層

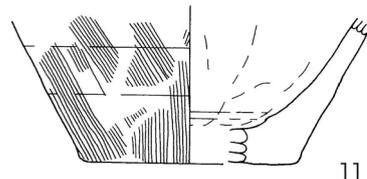
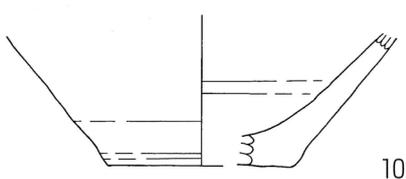
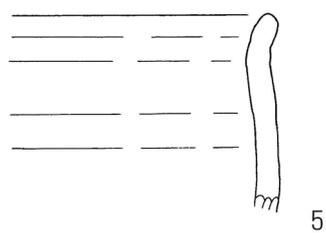
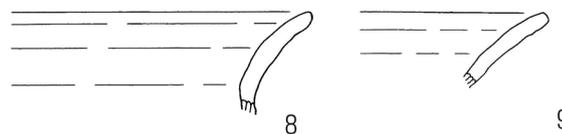
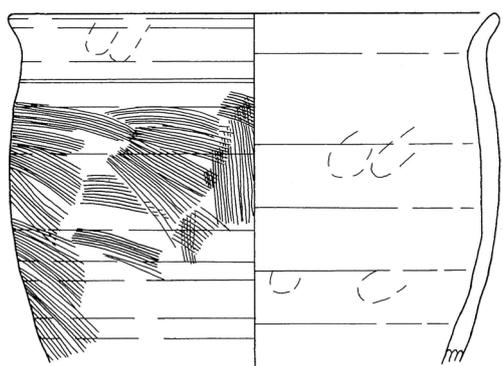
図版7 調査区西壁 (2)



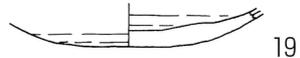
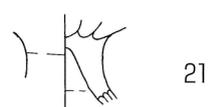
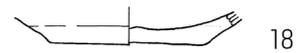
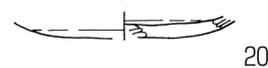
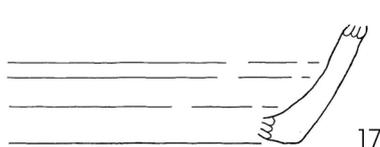
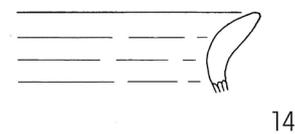
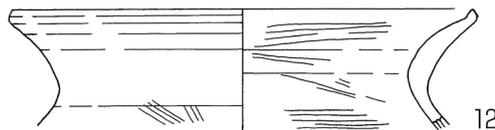
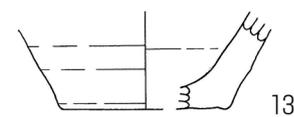
土坑 2 出土遺物



溝 1 出土遺物

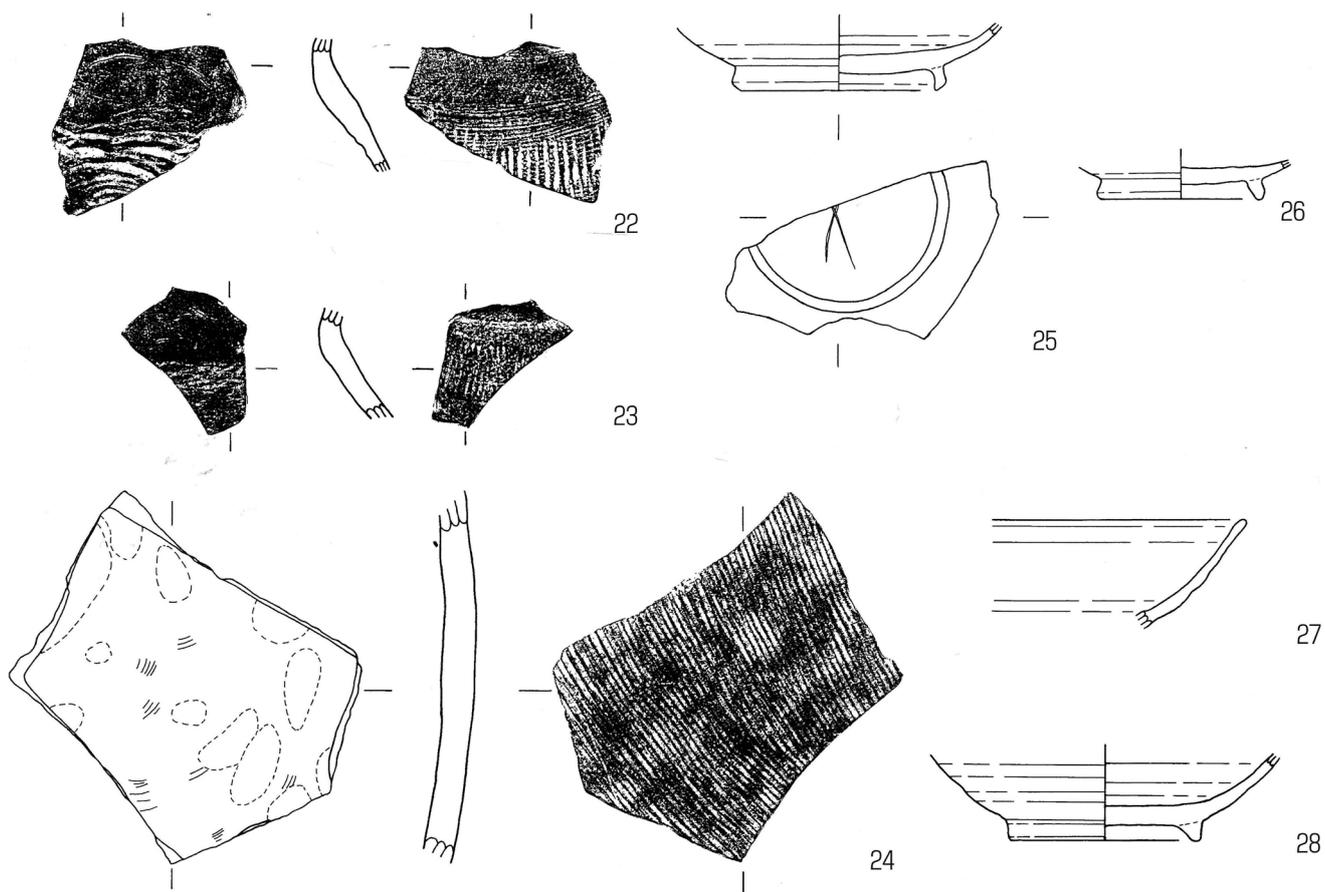


土坑 6 出土遺物

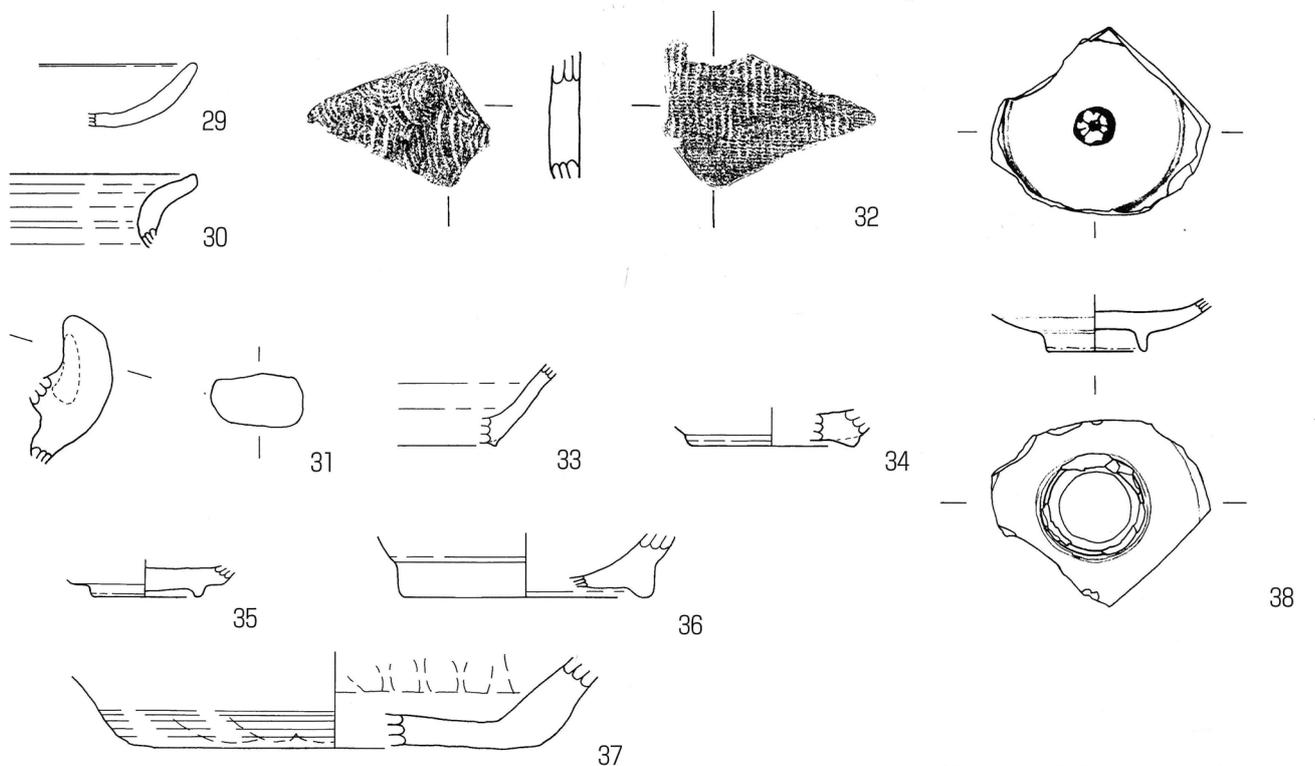


包含層





包含層



攪乱・排土

0 1:3 10



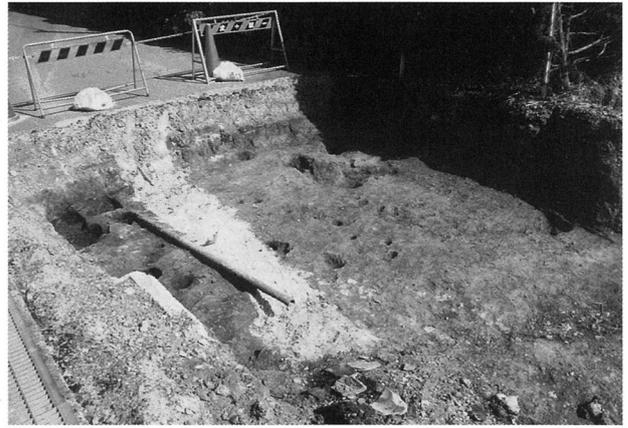
調査前近景



遺構面完堀状況（北から）



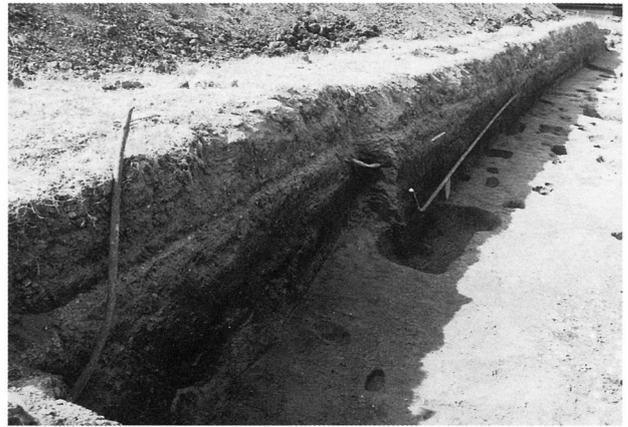
調査風景



遺構面完堀状況（北西から）



調査風景



調査区東向き壁断面



調査風景



調査区北向き壁断面



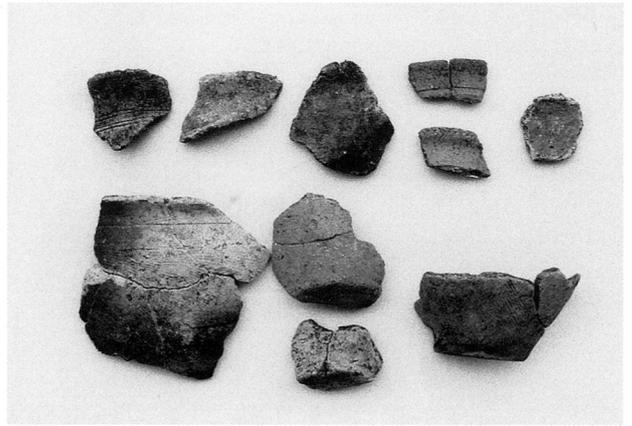
溝1 全景



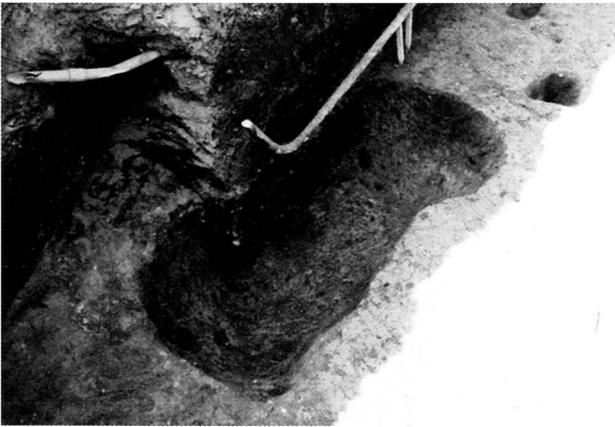
柱穴 20・22・24



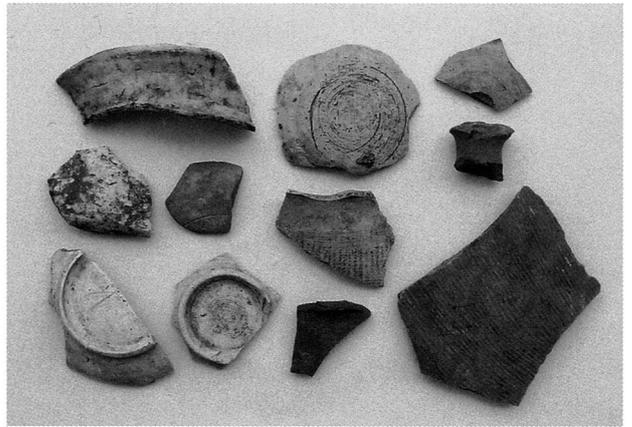
溝1 断面 (調査区東向き壁)



出土遺物



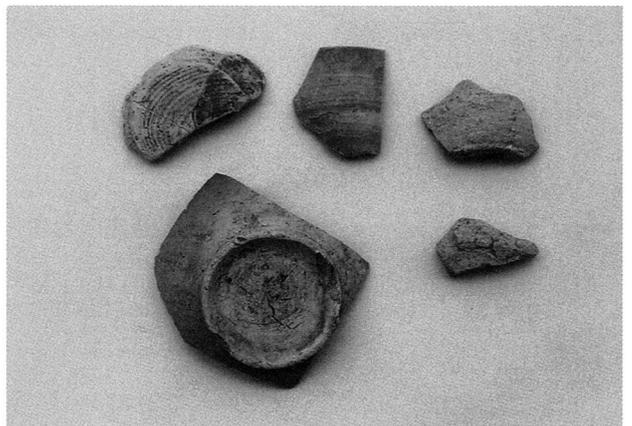
土坑6 全景



出土遺物



土坑6 断面



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かさまついできはつちようさほうこくしょ						
書名	笠松遺跡発掘調査報告書						
編著者名	水谷芳春、斉藤理、宇佐見亜紀						
編集機関	桑名市教育委員会						
所在地	511-8601 三重県桑名市中央町二丁目37番地 TEL0594-24-1361						
発行年月日	西暦2005年7月29日						
ふりがな 所有遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査機関	調査面積 m ²	調査原因
		市町村 遺跡番号					
かさまついでき 笠松遺跡	みえけんくわなし 三重県桑名市 おおあざうえの 大字上野 あざかさまつ 字笠松303	242055 No.139	35° 3' 37"	136° 42' 1"	20040728 ～ 20040809	112 m ²	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項	
笠松遺跡	散布地	古代 中世 近世		溝 土坑 柱穴	弥生土器 須恵器 灰釉陶器 山茶碗 近世陶磁器 土師器		

三重県桑名市
笠松遺跡発掘調査報告書

平成 17 年 7 月 29 日

編集・発行 桑名市教育委員会